
サクラノマホウ

王蟲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

サクラノマホウ

【Nコード】

N5257Q

【作者名】

王蠱

【あらすじ】

月光に照らし出された満開の桜。

春の夜風に揺れるその木の下にたたずむ少女。

(前書き)

アニメ「ダ・カーポ」とセカンドシーズンを見て書きました。
よってゲーム版および「ダ・カーポ2」以降の設定などについては
触れていないし一致しない部分があるかもしれません。
あしからず。

空の色は闇に限りなく近い蒼。頭上から淡い銀色の光を降り注がせ続けるのは

そんな夜空にひととき大きく、美しく輝く満月。私はまるで誘蛾灯に惹かれる

羽虫のようにふらふらとした足取りで庭に出た。明るい。春先のまだ少し薄寒い夜風が

私の髪を揺らし頬に当てる。そのくすぐったいような感覚もどこか夢の中にいるように

はつきりとしない。いや、これは夢なんだろう、きっと。

「・・・綺麗だね」

『うん』

独り言のつもりで言った台詞。予期せず返された言葉の響きは私と同じ、

でもどこか違う耳慣れた声。

「えっ、咲華？」

『?どうかしたの』

それはやはり彼女　咲華の声だ。私とそっくりな声音なのになぜか少し大人びたように感じられる、不思議な感覚。生まれた時からずっと一緒にいる、誰にも見えない

私の中のもう一人の人格。そんな彼女が今、私と同じ場所にいる？

『もう、どうしたのぼーとしちゃって。寝ぼけてるの?』

「えっ、あ、うん・・・?」

彼女の調子はいつもの通りで変わらない。なのになぜか私は今いる“ここ”がどこか

よくわからない、そんな不思議な感覚に陥っていた。場所は・・・分かる。

鳴桜邸。私と・・・それから今は不在の兄が借りている古い屋敷。

近所ではもっぱら幽霊屋敷として有名だというその庭先に私は素足で立っていた。

そう、そこまでは理解できている。分からないのは私がなんで夜中に、しかも部屋から

移動した記憶もなくそんな所にいたのか、ということ。寝ぼけて、というのが一番

合理的な回答だと思う。実際私はそんなに寝相が良い方ではないし、多少無理はあるかもしれないが必要以上におかしい回答でもないと思う。でも。

「咲華。私どうやってここまで来たか分かる？」

『どうやってって・・・えっと普通に・・・あれっ？』

姿は見えなくても長い付き合い、彼女が考えるような素振りをしているのは雰囲気です

分かる。彼女と私は一緒に違う2つの意識。そんなだから私が寝ながら徘徊していたのに彼女が気付かないというのはちょっと変だ。現に今まで似たようなことが

起こりそうになったときなどはからかいつつもさりげなく起こしてフォローしてくれていたのだし。

私は再び空を見上げた。咲華も同じ光景を見る。月はちょうど天の中心を少し過ぎた程度。それを描き出す濃紺のキャンパスに白く輝く何かが舞った。

「桜？」

風に乗る美しい軌道で舞い続けるそれは無数の桜の花びら。本当に微かな、でも

だからこそなにか惹きつける香りに誘われるまま視線をまっすぐ前に戻す。

そこに在るのは夜空の闇を押し返すかのように白く映える桜の木。根元のあたりで

二つに別れた幹が互いに絡まり合い、螺旋を描き高く伸びている。

その先から伸びた枝には今、満開の花弁が誇るように咲き乱れてい

る。

「鳴桜邸」の名の由来だというその大樹の傍らに女の子が立っていた。

「誰・・・？」

思わず漏れてしまった声が聞こえたのか、それとも単にタイミングが合っただけか。

花を見上げていた少女が私の方を向く。

金色の髪を青っぽい色のリボンでツインテールに結んだ、かわいい子だ。

背丈から察すると小学校の高学年から中学生くらい、といったところか。

蒼い色味が印象的な瞳でまっすぐに私を・・・私と咲華を見つめている。

咲華の存在がこの子には分かっている。そんなのはただの錯覚。だと思っただけだ。

「にやはは・・・こんな夜遅くにどうしたのかな、君たちは」

君『たち』。なぜか寂しげな笑顔で告げた少女に私たちは

どう反応すればいいのか分からなかった。

「あなたは・・・」

『あなたは誰？こんな時間に人の家に不法侵入する不審人物にしては、随分と可愛いけど』

私の言葉を遮り面白そうに咲華が訊ねる。他者に聞かせるためのその声は私の喉から出ただけけれど。

「んー、その言い方はちょっと傷つくなあ。僕はただこの桜を見に来ただけなんだけど」

苦笑して言う少女。夜桜見物？なら他にもっといいところがあるだろうに。

なんでわざわざ他人の家の敷地に入ってきたのか。そんな結論に至

り呆れた

私と咲華を眺めた彼女はこちらの考えを察したのか表情を変えず首を横に振る。

「なんか勘違いしてるよね？僕が“ここ”に来たのは花見とかじゃないよ。」

それならうちの近所で一年中できるしね」

「一年中花見？」

言ってる意味がさっぱり理解できない。そりゃ花を見るのが花見なら別に桜じゃなくても向日葵ひまわりでも秋桜コスモスでも何でもいいのかもしいが、やっぱりそれはどこか違うと思う。

「僕はね、確かめに来たんだ」

『確かめる？何を？』

耳に届いた言葉の主は咲華。回答を促されて数秒ためらうように唇を揺らしていたが。

「・・・この桜に“魔法”がかけられているかどうかを、だよ」

紡ぎ出された音の羅列は意味を持つ言葉となって私の意識に届いた。

「・・・この桜の木はね、ずっと昔に僕のおばあちゃんが植えたものなんだ。」

植えたのは一本だけだったらしいんだけど誰かがまた植えたのかもしれないに寄り添ってるね」

ごつごつとした幹を撫なでるように彼女は触れる。なんということないはずの仕草。

でもその光景はどこか幻想的で、名画を見ているようなときのような気分さえ感じてしまう。

『・・・』

私の中の咲華も同じように感じているのだろうか、さっきから一言も発しない。

くるり、と少女が木の周りを回る。風に舞う桜色の花びらに飾られ

たその姿はまるで

精霊のようだ。そんなことを私が思っている間に彼女は元の場所に元のように立っていた。そして私たちを見つめる。

「おばあちゃんはこの木にある魔法をかけた。この街の人たちが幸せになる

手伝いをする・・・そんな、魔法」

《そんな魔法・・・私は知らない・・・》

咲華が私の中で何か呟いた気がした。

「はは、当たり前だよ。魔法は・・・一つじゃないんだからさ」

女の子の唐突な返しは咲華へのものだろうか？ いったいこの子は現状を

どう知覚しているのだろう。驚いているらしい咲華を無視して少女は続ける。

「でもこれを見る限りその魔法は失敗しちゃったみたいだね」

安心したよ。そう動いた唇を私は見逃さない。

「安心した・・・？ どういう、こと・・・」

ほんの少し話しただけでも分かる。この子は人の不幸を知って笑うような子じゃない。

不幸でない＝幸せ、という等式が成り立つほど世の中単純じゃないことなんて

分かり切ってるけど、それでも彼女の語る内容には何かもやもやとしたものが

感じられてならない。

不意に彼女の視線が私とまっすぐぶつかる。気圧けあされたかのように動けない

私と咲華に。

「誰かが幸せになる代償を別の誰かが払うなんて、僕は認めない。それだけ、だよ」

放たれた言葉は突然吹き荒れた桜色の嵐の中に溶ける。散る花びら。それは私たちの視界を覆い尽くし、次第に意識もその色に染まっただけで……

「だから君たちも……願いは自分の手で叶えなきゃ、ね」

届いた言葉も、落ちていく意識の中ではもう意味を理解することなどできなくて……

目覚め。安眠を妨害する電子音に抵抗したいのはやまやまだけど、半分以上寝ぼけた頭でも今日は寝坊しちゃいけない、ということはいっさかり覚えていた。手を伸ばし、けたたましく鳴り続ける目覚ましを止める。

ベッドから起きて着替えるのは真新しい制服。

「おはよう。いやあ、やっぱり何回見てもよく似合ってるじゃん。

こりやお兄ちゃんも鼻高々だろうねえ」

「こ、高校生活最初の朝からなに言ってるの！」

「別に〜？あ、そう言えばお兄ちゃんって誕生日いつだったけ、結婚は早い方がいいよね〜」

「け、結婚って……」

「学生結婚かあ〜。響きだけでもなんか面白そう。しかも義理の兄妹。」

人によつてはものすごくそそられる展開だね！」

「人の人生勝手に想像して楽しまないでよ……」

頭が痛い。時折りよく分からないことを一方的に言い出す彼女だけが今日はそれ以上に

精神的にキツイものがある。

入学早々心労で保健室送りにでもされたらたまったもんじゃない。

「ほら、邪魔だから少し静かにしててよ。今日は早く出ないといけ

ないんだから」

『はいはい。ちえっ、せっかく面白くなってきたところだったのにこっちは全然面白くない。ただどこまでも恥ずかしいだけだ。なんとなく窓の外を見る。そこには桜の大樹が天に届けとばかりの勢いで幹を伸ばす。

その昨日と変わらないはずの光景に、私と咲華はしばし見入っていた。

理由は・・・よく分からない。

やがて思い出したように咲華が動きだし私もその場を離れる。

『あー！和葉和葉、ちよつとこっち来なよ、いいもの発見！』
キッチンの方から彼女の声がする。私はいはい、と苦笑しつつもそちらへ歩きだす。

螺旋に絡まる桜の木の陰。湿った地面に付けられた小柄な足跡の上に、

小さな桜色の花弁は音もなく舞い降りた。

(後書き)

時期としては

「アスラクライン」14巻の直前、

アニメ「ダ・カーポ」か「ダ・カーポ セカンドシーズン」直後

(お好きな方で解釈してください)。

桜つながりで思いついただけの話のはずが書きすすめるうちに

意外と似ている要素があることを発見できた話でした。

咲華の設定については・・・勝手な設定が多分にありますけどどうか

ご容赦を。

よろしければ感想よろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5257q/>

サクラノマハウ

2011年10月8日03時19分発行